

外国人研修生に有機農業を教える

橋本有機農園 橋本慎司さん



持続可能な農業をめざして キーワードは「海外」

市島町前山地区で有機農業に取り組む橋本慎司さん。海外生活の経験を生かして、7年前から有機農業を学びにやってくる外国人を年間で15カ国・50人ほど受け入れています。

有機農業を学ぶため丹波市へ移住した橋本さんに、農業への思いや外国人との生活について伺いました。(写真中央)



有機農法で野菜や米を栽培

父の仕事の関係で高校時代を海外で過ごし、大学進学を機に日本に帰国しました。大学生の時に行ったインドへの旅がきっかけで、自然や食に興味を持ち、食品流通の生協（コープ）に就職しました。

その後、安心できる食べ物を自分で栽培したいと思い、平成元年に有機農業の歴史の古い市島地域に移住しました。試行錯誤して土作りし、現在は有機栽培で野菜や米を栽培しています。

7年前から研修生を受け入れ

様々な国から訪れる外国人に農業を手伝ってもらう代わりに、受け入れ側の農場は滞在期間中の食事と宿泊場所を提供する「W・W・O・F」という制度を使って、7年前から外国人研修生を受け入れています。

1度に2、3人の外国人を受け入れており、個人の能力に合わせて農作業の割り振りを変えています。国によっても宗教や考え方が違うので、例えば欧米の人にはまず目的を話し、アジアの人にはまずどんな作業をするかを話します。また、妻が作る人気のカレーも、甘口と辛口の2種類を用意しています。

日本の文化も体験

農作業だけでなく、日本的な楽しみも感じてほしいので、空手を教えたり、地元の祭りや運動会に連れて行ったりもします。地元の人も初めは戸惑いがあったようですが、少子高齢化で祭りの存続も危ぶまれる中、外から来てくれた人と一緒に取り組むことは、良い刺激になっていると思います。また、日本固有の文化や宗教について最初にきちんと説明し、役割や意味を知ってから体験してもらうことで、文化の違いを尊重できるようにしています。

海外販売も視野に入れて

昔に比べ、有機農業は徐々に産地が増え、技術も発達し、農家が増えてきました。しかし社会が高齢化し、購買力が落ちたことで需要と供給のバランスが悪くなり、有機農業の市場は飽和状態になりつつあります。地産地消は農業の理想ではありますが、現実的には「外」に販売先を確保していかなければ立ち行かません。今後、海外で販売することも視野に入れ、外国人に求められるものを知ることが大切です。安心な物を作り、消費者にも選ばれる、そんな農業ができたらと思います。